蔵王道路開通にともなう温泉地の発展

長谷川 典 夫

温泉地は、利用客の増加、客による消費額の増加、通年的利用（利用の季節的変動の減少）などを必要条件として集落の発展をみる。

筆者は、広域観光交通路の開発にともなう温泉地発展の事例として、宮城県の遠刈田・青根および岨々の3温泉地をとりあげ、蔵王道路開設前後の1961～1963年の利用客数の変化を調べた。

宮城県側より蔵王山頂へ至る通常利用経路はすべて遠刈田を経由し、その西方で2分した道路は、一方が青根・岨々を連ねて再び合し、岨々南方で有料の蔵王道路に続き、山形県上山市に通じる。

遠刈田は、1961年の利用客58,496人、うち宮城県内客が90%を占める典型的な湯治場であったが、蔵王道路宮城県側の開通した1962年には利用客は113,188人に著増、そのうち県内客は80%増にとどまったのに対し、県外客は約10倍に増え、県内客比は50%に減じた。全道開通の1963年の利用客は30%増にとどまったが、県内客比は20%に減じ、県外客は前年のさらに2倍に増加して、道路に接続する山形県からの40%（県外客構成比）をはじめ、関東30%を含むかなり広域の利用客を有するに至った。

遠刈田と対照的に、青根は1961年当時60%が県外客で占められ、福島・山形・茨城の各県からの来客多く、遠刈田より広域な利用客を集めていた。しかし1962年の利用客数100,506人の内訳を見れば、県内客の50%増に対して県外客数に大きな変化なく、その比率はほぼ相半ばし、利用客分布からは遠刈田とは逆の傾向を示した。しかし1963年には県内客の減少と県外客の50%増によって、その比率は3対7と変じ、山形・福島・秋田の各県よりおのおの20%、関東その他より40%の県外客構成をみ

るに至り、遠刈田と類似の傾向を示し始めた。岨々は収容力が小さく、利用客は漸増したが、大きな変化はなかった。

以上のように、遠刈田・青根は、蔵王山へ通じる交通路の整備により、観光ルートの宿泊拠点としての性格を強めた結果、利用客の増加とその居住地分布の広域化がみられた。一方、観光基地としての性格上、利用客数の季節的変動は、やや減じつつあるとは言え、いぜんとして大きい。

いま、上記2温泉の利用客数・利用客居住地分布・利用の季節性の3つの点でその変化を、集落の人口・家屋数・業種構成の変化と対照させ、かつ作並・秋保その他の温泉地と比較して考えれば、次の観点が生まれてくる。すなわち、木内による季節性(1940)および社会圏(1942)による温泉集落の分類は、その性格分類であるとともに、ある温泉地についての、また幾つかの温泉地の比較における、発展段階による類型化の意味を含むと考えてよいと思われる。

(1968. 11. 8 受理)

Increase of Visitors to Tokatta and Aone Spas due to the Opening of Zao-Highway

Norio HASEGAWA

On the eastern slopes of Zao Volcano, there are three hot-spring spas along the road leading from Sendai city to Zao Volcano. They are Tokatta, Aone and Gaga. In April, 1963, for the development of tourist industry, the whole line of Zao-Highway was opened to traffic from Tokatta to Kaminoyama city, Yamagata Prefecture, via the top of Zao Volcano. Since then, the tourists visiting these spas have been rapidly increased. For example, in the case of Tokatta, the visitors increased from 58,500 in 1961 to 146,000 in 1963. At the same time, the areal distribution of the visitors' homes has become more extensive.